

じやっど新聞

JADDO新聞 第15号
1996年 新

JADDO

アジアの子ども達を援助する会

事務局 ; 〒895 鹿児島県 川内市 神田町 11-20
若松記念病院内 TEL. 0996-20-1402
FAX 0996-20-4646

JADDO視察団と専門家ラオスへ

1996年4月28日～5月8日に第3回じやっどツアーでラオス訪問をしました。(セミナーは今回で2回目となります。)今回のツアーでも、ラオスの小学校の先生たちを対象にしたセミナーを開催いたしました。

今回のメンバーは以下です。(五十音順)

専門家

倉野順恵	保育園保育	(第1班・川内)
佐藤進子	高校教諭	(第1班・川内)

視察員

加藤久則	国際保健研究生	(第1班・長崎)
神崎侯至	会社社長	(第2班・川内)
神崎たかし	中学1年生	(第2班・川内)
神崎ひろし	中学1年生	(第2班・川内)
黒田真季衣	児童福祉学科3年生	(第1班・東京)
柳原敦子	医学部6年生	(第1班・長崎)
松山容子	ソーシャルワーカー	(第1班・東京)
森田正人	医学部6年生	(第1班・長崎)
若松大介	外科医	(第1班・川内)

スタッフ

帖佐理子	じやっど代表	(第1班・川内)
------	--------	----------

第1班の川内・長崎グループは福岡空港に集まりタイ航空でバンコクへ、東京グループは成田からユナイテッド航空でバンコクへ、9人はバンコクで合流。

第2班はうまく席がとれず、川内から熊本へ。大韓航空でソウルーバンコクービエンチャンを3人で往復でした。30日午後ビエンチャン空港でやっと全員そろいました。ビエンチャンで初めて会ったメンバーでしたがにぎやかに楽しく、時に厳しいおもしろいツアーとなりました。

ມອບເງິນຊ່ວຍເຫລືອ ໂຮງຫມໍເສດຖາທິລາດ

ເມື່ອວັນທີ 30 ເມສາ 1996 ທີ່ກຽວຂ້ອງຈຳນວນໜຶ່ງ ເງິນທີ່ຜ່ານມາ ຢູ່ທີ່ໂຮງຫມໍເສດຖາທິລາດ ມະຄອນຫລວງວຽງຈັນ. ອົງການ ແພດນ້ອຍ (JADDO) ຂອງ ຍີ່ປຸ່ນໄດ້ນຳເງິນມາມອບໃຫ້ໂຮງຫມໍດັ່ງກ່າວ ໂດຍແມ່ນ ດຣ. ປິວ ພັນ ພັນທະວະດີ ຫົວໜ້າອຳນວຍການໂຮງຫມໍເສດຖາທິລາດເປັນຜູ້ຮັບ ໂດຍຊ່ວງໜ້າພະນັກງານ ທີ່ກຽວຂ້ອງຈຳນວນໜຶ່ງ ເງິນທີ່ມອບຮັບກັນໃນຄັ້ງນີ້ມີຈຳນວນ 25.000 ບາດ (ເງິນໄທ) ເຊິ່ງເປັນການປະກອບສ່ວນເຂົ້າໃນວຽກງານບໍລິການຄົນເຈັບ ໂດຍທາງໂຮງຫມໍຈະນຳໄປໃຊ້ຕາມຈຸດປະສົງຂອງອົງການແພດນ້ອຍຂອງ ປະເທດຍີ່ປຸ່ນ ໃນອັນຕໍ່ໄປ.

川内、長崎、東京からあわせて12名の参加となりました。ラオスの現状と”じやっど”の活動を大勢の目で見てもらいました。参加者からいただいた意見を今後の活動に反映していきたいです。

スケジュール

4月28日	第1班 出発
29日	第2班 出発
	第1班 ビエンチャン到着
30日	午前：厚生省 セタチラート病院
	第2班到着
	午後：日本大使館 ノンサワン小学校
5月 1日	タラート小学校
2日	セミナー
3日	鈴木家で朝食、幼稚園見学、セミナー
4日	ドンカルム小中学校、タドゥア小学校
5日	ビエンチャン発 バンコク着
6日	アユタヤ観光
7日	バンコク発 第1班帰国
8日	第2班帰国



じやっどのメンバーの訪問を伝えるビエンチャン新聞。左から総婦長、ソムチット医師、松山、黒田加藤、院長、若松、森田、倉野、加藤、佐藤、帖佐

若松大介医師からセタチラート病院院長へ2万5千パーツの寄付がありました。院長からは、そのお金を基にして、貧しい人達を無料で診療できるシステムを作りたいと話がありました。

第2回 教師を対象とした教材活用セミナー

5月1日、2日にセミナーを開催しました。

- 第1日午前；遊びとりズム。遊びの中の算数。
身近な材料で作る遊ぶ。
午後；物語。絵本作製
2 午前；さいころ作り。さいころを使った算数
ゲーム形式の算数。エプロンシアター
午後；ラオスの先生たちの発表
ソムチット医師による衛生指導

25名の参加者（小学校の教師、教育委員会）の3分の1は前回に続き2回目の参加でした。初めは楽しそうな先生、つまらなそうな先生戸惑っている先生など見られました。が、どの先生も専門家の熱心な指導に引き込まれていったようでした。

通訳にソムワンさん（ビエンチャン市立セタチラート病院、看護婦、日本に留学経験あり）と鈴木琴子さん（助産婦、ラオス滞在中）、中村さおりさん（臨床検査技師、ラオス滞在中）をお願いして、授業を行ないました。

グループに分かれて行なう教材作りの時は、視察のメンバーにも制作を手伝ってもらい、神崎たかし君、ひろし君にも絵を描いてもらいました。

通訳が入りますが、専門家の倉野順恵さん、佐藤進子さんの熱意は十分伝わり、セミナーの修了式で佐藤さんが感極まって涙を流した時、いっしょに笑い泣きしている先生がたくさんいました。

今回の専門家には前回の専門家から託された責任に9人の視察団からの希望などが加わり、大変な重圧になったようでした。セミナーの前に専門家はお二人ともストレス性の胃炎を患ってしまいました。責任者として申し訳なく思います。

セミナーの目的と内容。専門家の責任範囲。視察員への説明と協力体制など今後考えていきます。

倉野さん、佐藤さんはじめ参加者の皆様に感謝いたします。応援してくださっている会員の皆様にもありがとうございました。（帖佐理子）

専門家のレポートから抜粋

（大作のレポートから抜粋して掲載させていただきます。）

倉野順恵（清水丘保育園 保母）

ラオスのはのんびりしており、家族が同じ時間を共有できるという意味ではずっと日本より恵まれているように思えることでした。

しかし、衛生面をみると決して十分なものではなく衛生指導をこれからもさらに重要視していかなければならない。又教育にも差があり一貫した教育内容（教育をうけること）が必要であると感ずることだった。（略）

今回私たちが日本から持って行った材料で小学校の先生方と楽しい一時を過ごしましたが、果たしてそれがどのように活かされるのだろうか？と悩むこともあります。せめて今回作ったものを利用して授業に少しでも役立ててくれたら嬉しく思います。

「サバイディー」と両手を合わせ挨拶してくれた人々、向かえてくれた人々、とても懐かしく優しい気持ちにさせてくれました。

佐藤進子（川内高校 教諭）

セミナーの朝は大変な緊張と共に明けた。・・・（略）

昼食休息の後、ラオスの先生側から「ラオスの折紙を見せたい」との要望があり作ってもらうことになる。ラオスの先生たちはとても細かい手つきで複雑なもの、例えばエビやチョウなどを簡単に仕上げている。最後は双方で交換しあい紹介しあう。・・・（略）

一日が終了し、私は疑問の中にいた。自分が何をしにきたのかわからなくなってしまっていた。セミナーをしにきた。それは間違いない。そして一日を終えた。しかし、そもそもセミナーとは何なのだろうか。私たちは教材の利用を伝えにきた。しかし、教材の使い方を伝えたかたははずなのに、教材を分け与えてきただけに思えて、心がきつい。また、子供じみているのではないかという気持ちも湧いてきて、ラオスの先生たちに失礼なのではないかと心配にもなる。疑問を理子先生、順恵先生にぶつけてみる。この時は「今日はラオスの先生たちものりが悪かったね。積極的でなかったね」という感想に始まり、もっとうしたら、ああしたらの反省となった。・・・（略）・・・たくさんの反省点がだされる。反省しながら、やはり疑問はぬぐえない。しかし、ソムワンさんの言葉を考えると少し心が楽になってきた。その言葉とは、今日の午後の絵本作りの最後でパンチを配り、綴じる穴を開けてもらう際、私の言った「こうした道具を使わなくても、木でも何でも穴は開けられます」の言葉に対する「それはラオス人達のほうが知ってるよ」の一言だ。自分たちが教材の使い方を日本的に説明するのを、ラオスの先生たちは自分たちなりに消化してくれるんだという思いを持てるようになってきた。まだセミナーはあと半日ある。考えながらやってしまった今日、明日は考えや悩みにとらわれずに思いっきりやってみよう、そう思う。・・・（略）・・・楽しい。この雰囲気の子供たちにも伝わらないはずがないと思うとうれしくなる。・・・（略）・・・この休憩中に昨日やった折紙をしようとラオスの先生方から声を掛けられて、時間を一杯に使って指人形作りを楽しむ。・・・（略）・・・午前中の最後は加藤さんによるエプロンシアター“うさぎとかめ”。2日前にやってもらうことになったもの。私たち2人は「エプロンシアターはこうやるんだ」というとらわれがあったが、そんなものを打ち砕くような体を使った演技にラオスの先生方も引きつけられている。それを観ていて、昨日からの疑問は一掃できてしまったように思う。何も決まりきったことをする必要はない。自分たちのやり方を押しつけてきたのではない！それが心のどこかで詰まっていたのだけど、ぱっとつかえが取れた感じだった。・・・（略）・・・「子供と一緒に」という言葉を言うことを忘れないうように心掛けていた自分たちに気付く。・・・（略）・・・これが私の中でのセミナーの目的なのかもしれない。自分自身のやり方で、でも独断ではなく”子供たちと一緒に楽しみながら！”何だか自分自身が納得し、泣きだしてしまいそうに感動した一瞬だった。・・・（略）・・・川内で毎日毎晩、嘘のように2人で頑張って準備してきたことが思い出される。・・・（略）・・・もちろん日本組メンバーの協力なくしてはこの感動はなかったはず。「終わっちゃたね」と笑う順恵先生に、どうしても涙が止まらない。・・・